

- 取組のねらい** 中学生・高校生等を対象とした取組の充実 地域全体の読書意識の向上
子供が本に触れるきっかけづくり
- 取組の主体** 教育庁生涯学習課社会教育・読書推進班
- 取組の対象** 中学生・高校生
- 取組の予算** 読書事業費950万円(うち500万円が企業版ふるさと納税制度による)のうち、270万円

取組の背景・課題

県として市町村教育委員会や図書館を通じた小中学生への読書支援を行うとともに、県立学校(高校、特別支援学校)の図書館に対し直接の支援を行ってきました。特に、小中学生段階で身につけた読書習慣をその後も保ち継続することの大切さを重視し、高校生の読書活動のさらなる推進を図ることとしました。

取組の概要(課題解決にむけた対応策)

秋田県では、高校生に向けた読書推進の取組としてビブリオバトル、ビブリオツアー、ラジオ番組の放送を行っています。高校生自ら発信する取組を行うことで周囲に読書のたのしさと魅力を伝える効果を狙っています。

高校生が読書を親しむきっかけづくりとして平成26年度からスタートした「ビブリオバトル大会」は平成29年度で4回目です。平成29年度は県内6か所で地区大会が行われ、中学生大会も初開催しました。県内ショッピングモールでの全県大会の様子や優勝者インタビューを県の広報番組で放送するなど、積極的な情報発信も行っています。また、地元新聞でも特集記事で取り上げられました。

さらに、ビブリオバトル大会上位者は、東京での「ビブリオツアー」に参加できます。このツアーでは、県が参加者の旅費等の経費を負担し、出版社見学や作家との座談会、ビブリオバトル全国大会の見学等が行なわれ、参加する高校生の将来のキャリア形成に向けた意識醸成や読書活動に関わる人材としての育成を目指しています。

加えて、大会出場者の中・高校生などが本の紹介を行うFMラジオ番組「ビブリオラジオ」も放送しました。平成29年10～12月の3か月間に週1回(全14回各5分間)放送され、普段本に触れることがない層へも幅広く本の魅力を発信しました。

取組による効果・成果

ビブリオバトルに対する学校の認知が進み、出場のための予選が学校内で開催されたり、授業でビブリオバトルが行われたりするなど、連動した活動が見受けられるようになりました。また、ビブリオバトルについて広い層の県民へ周知でき、読書活動の認知度向上へ繋がりました。

また、ラジオに中学生や高校生が出演することで、学校や家族等、周囲の関係者の興味を喚起することができ、「来年はビブリオバトルを頑張るラジオに出たい」と話す生徒が出てくるなど、周囲の生徒たちのモチベーション向上へと繋がっています。



ビブリオバトル全県大会



取組の工夫点

●「読書が広がるホップ・ステップ・ジャンプ事業」

秋田県では、様々な読書の楽しみ方を提案する「ホップ」、読書の楽しさを伝える人材育成を行う「ステップ」、読書の喜びを発信する機会を提供する「ジャンプ」、の3つのステップで事業を推進しています。高校生向けの取組としては、ホップには「ビブリオラジオ」、ステップにはPOP作りや読み聞かせの講座、ジャンプにはビブリオバトルなどが挙げられます。

●取組を通じた高校生リーダーの育成

ビブリオツアーなどを通じて人材育成にも力を入れています。参加した中・高校生が同世代の読書活動のオピニオンリーダ的な存在となって活躍できるような場を設けています。例えば、高校生の企画参加型取組として、平成30年度のビブリオバトル地区大会に高校生自らが企画段階から関わり、主体的に運営していく形とする予定です。さらに今後は高校生によるSNS等での情報発信も予定しています。

- 取組のねらい** 子供が本に触れるきっかけづくり 子供の発達段階に応じた取組の充実
不読率の高い中学生・高校生等を対象とした取組の充実
- 取組の主体** 教育委員会事務局生涯学習課・県立図書館
- 取組の対象** 高校生
- 取組の予算** 93万6千円(H29予算) 主な内容として、育成研修の講師旅費・報償費、企画会議や高校生読書交流会用消耗品費、普及・啓発資料等(リーフレット・ポスター)印刷製本費 等

取組の背景・課題

「栃木県子どもの読書活動推進計画(第三期)」(平成26年3月)を策定するに当たり、二期計画期間中の推進状況の検証において、高校生の不読率が高いことが栃木県の課題として挙げられました。これを受け、三期計画では、「子どもの発達の段階に応じた取組の推進」を方針の1つとし、同世代へ読書の意義や楽しみを伝える高校生読書活動推進リーダー「読書コンシェルジュ」を育成し、自主的、自発的な読書活動を推進する高校生読書活動推進事業を開始しました。

取組の概要(課題解決にむけた対応策)

「読書コンシェルジュ」は、読書コンシェルジュ育成研修(7～8月、3日間)の修了者に対して任命するものです。任命された読書コンシェルジュは、高校生読書交流会(11月、12月開催)の企画・運営や、同世代に向けたおすすめ本の紹介等の活動を行います。この企画・準備等のため、読書コンシェルジュ企画会議(8月～10月、3回)に出席します。また、年間活動のふりかえりの機会として、読書コンシェルジュ活動交流会(1月、1回)へ参加します。その他、育成研修中、学校や地域での活動計画を立案する等により、読書活動の推進役として自主的な活動を促しています。

取組による効果・成果

「読書コンシェルジュ」の周知や参加申込みは学校経由で行っています。また、学校教育関係の会議、関係機関・団体の会議や研修等において、学校側の認知度を高めるため情報提供や協力依頼をこまめに行っています。

平成26年から28年にわたって読書コンシェルジュが高校生に向けて1年に30タイトル、計90タイトルの本を選びすぎり、リーフレットを作成しました。高校生ならではの感性を生かし、「学校」「恋愛」「将来」などテーマごとに魅力的な本を紹介しています。

読書コンシェルジュによる学校や地域での活動事例が報告されており、高校生が読書に親しむきっかけづくりに寄与していることがわかります。また、活動に参加した高校生のコミュニケーション力、情報発信力の向上も活動報告アンケートから読み取ることができます。

読書コンシェルジュの学校や地域での自主的な活動をさらに広げるためには、より幅広く子供の読書活動の関係者からの協力を得る必要があります。特に、主要な活動場所となる学校図書館や公共図書館との連携・協力を深めていくことが、今後の課題です。



高校生読書交流会(地区交流会)の様子



取組の工夫点

●高校生のアイデアを重視しつつ、負担にはならないように

「同世代への働きかけ」「同世代同士の交流」による読書活動の活性化が事業の要点であるため、高校生のアイデアを大切にしています。ただし、限られた時間で企画・準備を行うため、過年度の取組事例や反省等を有効に活用し、過剰な負担とならないよう配慮しています。

●専門家によるアドバイス

本や読書という多様な価値に関わる領域を扱う上で、県立図書館の司書が読書コンシェルジュアドバイザーとして事業に関わり、選書や展示における留意点等、本の専門家の立場から助言しています。

●計画のメリット

子供の読書活動推進に関わる施策を総合的・体系的に整理することで、県としての推進体制を明確にし、部局横断的に取り組むことができている。また、市町の子供の読書活動推進計画において、県計画の内容が反映されている事例が見受けられ、県全体での推進体制の整備における基盤となっています。

●計画の評価

計画の進行管理や施策について協議する場として、「栃木県子どもの読書活動推進協議会」(年2回)を設置しています。また、三期計画の指標に関わる調査として、学校に対しては「子どもの読書活動に関する実態調査」(抽出調査)、市町に対しては「子どもの読書活動推進に関する調査」を年1回行っています。

岐阜市 (岐阜県)
ぎふし

「ぼくのわたしのショート・ショート発表会」

- 取組のねらい** 不読率の高い中学生・高校生等を対象とした取組の充実
公立図書館の利用増大 図書館におけるプログラム(行事・集会等)の工夫・充実
- 取組の主体** 岐阜市立図書館(協力(株)集英社)
- 取組の対象** 中学生・高校生
- 取組の予算** 1,397,000円

取組の背景・課題

岐阜市では平成19年に第一次岐阜市子どもの読書活動推進計画を策定し、平成29年4月より第二次計画に取り組んでいます。子供の読書離れは大きな課題ですが、小学生から中学生・中学生から高校生の断層をどう埋めていけば良いのか。交流や発表・表現の場などを工夫する必要性がありました。読書離れが深刻化するヤングアダルト世代へ向けた取組のひとつとして継続しているのが「ぼくのわたしのショート・ショート発表会」です。

取組の概要(課題解決にむけた対応策)

「ぼくのわたしのショート・ショート発表会」は、中学生・高校生が自ら執筆したショートショート(超短編小説)を発表し、岐阜県出身の作家・朝井リョウ氏を迎えて作品のコメントやアドバイスを受けるイベントです。
 子供若者世代にとって魅力のある作家の講評を直接受けられることが本事業のひとつのポイントであることから、窓口として出版社の協力を受けています。
 出版社の担当編集者を通してイベントへの出演と作品選考を作家・朝井リョウ氏に依頼し、チラシ配布やホームページへの掲載の他、市内中学校・高等学校に募集案内を送付し、子供たちからの応募を募っています。
 毎年およそ50点の応募作品の中から事前に朝井氏、出版社担当編集者、岐阜市立図書館職員により作品が選考され、選ばれた作品は発表会当日に100名以上の観客の前で中高生自らの朗読による発表を行い、朝井氏から1人ずつコメントやアドバイスをいただきます。
 「中学生の部」「高校生の部」に分かれて発表を行います。どの作品も個性的で朗読を聞いているとその世界にぐっとひきこまれるため観客からは発表者である子供たちの発言や感性に感心する声も多く寄せられています。
 「未来の担い手」を育てたいという思いを込めたこの事業は、参加する子供だけでなく地域住民にも好評で、現在まで毎年開催しています。

取組による効果・成果

子供たちの作品を創作する意欲を高める効果へ繋がっています。毎年応募したり、前回大会を観たことで「自分も挑戦したくなった。」と話す子供たちが増えました。また、運営する図書館関係者からは「子供たちの表現力、想像力の高さを知ることができた。」という意見も寄せられました。第一線で活躍する作家からのコメントやアドバイスは、創作に取り組む意欲に繋がる等子供たちへ大きな刺激となっています。
 また、発表会で終わるのではなく応募作品をすべて書籍化し、図書館の蔵書とするとともに市内の中学校・高等学校に配布しています。自身の創作活動が形になることはそれを継続するモチベーションに繋がります。新たな創作活動を始める後押しとなると考えます。



ショート・ショート発表会の様子

ここが Point 取組の工夫点

●学生の興味関心を惹く広報活動

岐阜市立図書館が主体となり市の広報紙やホームページ、フェイスブックを活用した広報活動を行うほか、市内の中学校・高等学校に募集案内を送付し募集を募っています。募集案内のチラシやポスターのデザインは、中高生世代の感性に響くポップな表現を心がけて制作しています。また、発表会当日の緊張感や抵抗感を抑えるため、図書館長をはじめとする図書館職員がフランクな雰囲気作りに努めています。

●創作意欲を喚起する

著名人を招聘し講演を行うという従来型の取り組みでなく、子供たちが作品を生み出し自己表現の場にお

いて、第一線で活躍する作家と双方向の交流を行うことができる新鮮さは、子供たちの感性の育成や創作・表現意欲の喚起に繋がっています。

●職員の意識向上

読書活動推進計画は、岐阜市立図書館の附属機関である「岐阜市立図書館協議会」に主要事業の進捗状況を報告する仕組みとなっています。各事業の取組みの目的・方向性が明確化されることで、担当職員一人ひとりの事業推進における意識の高まり・意欲向上に繋がっています。

推進計画に示す各事業の進捗状況の把握や年度毎の成果の検証・評価を通して、計画の見直し・改善を行うことによって、より効果的な事業推進を図ることができています。